九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

雅語俗録 : 捌

中野, 三敏
福岡大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/4741976

出版情報：雅俗. 9, pp.247-267, 2002-01-30. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

雅語俗録　捌

中野三敏

五十一　犬の仕末

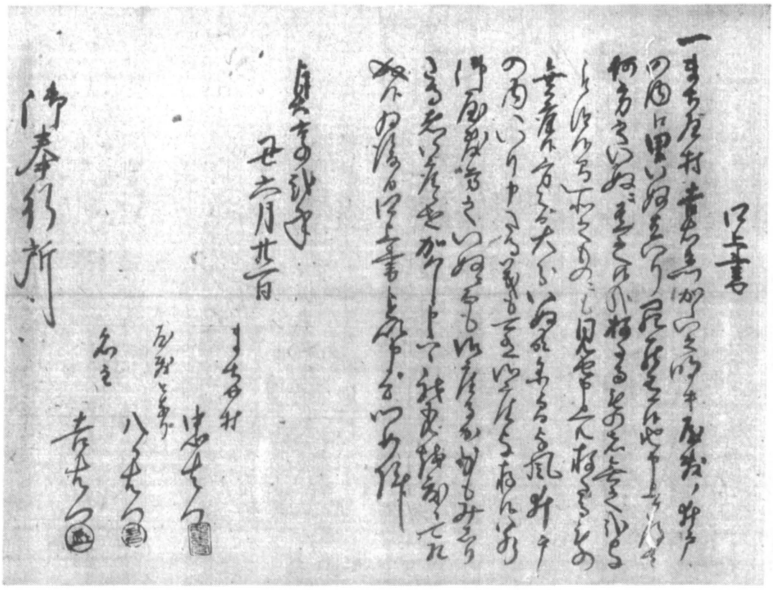
一、まち屋村吉右衛門かゝい(ママ)之明キ屋敷ノ井戸の内江黒いぬ立いり罷死有候由、申上ケ候得は、何方之いぬニ有之候哉、存たるものは無之哉与被仰候間、所之ものニも見せ申候へ共、存たるもの無御座候。方々より大分いぬ共参候間、与風井戸の内へいり申たる義も可有御座与存候。若御屋敷方之いぬニ而も御座るか、少もみしりたる者御座候をかくし申候はゝ、我等共越度ニ可相成候。為後日口上書を以申上候。仍如件

貞享弐年　丑六月廿一日

まちや村　忠右ヱ門印
屋敷となり　八郎右ヱ門印
名主　吉右ヱ門印

御奉行所

まだ名古屋に居た頃だから、もう三十年ほど以前、中区のテレビ塔の傍に大学堂といったように思うが近代物の古本屋さんがあり、その裏に藤為商会という古紙の仕切場があった。私に言う日本一の古本屋藤園堂の前身だそうで、初代の伊藤為之助氏が古本屋に転身後も名義を残しているのだという。二、三度のぞいて見てその度に縄で縛った和本の一括りを買った。後にも先にも和本を目方で買ったのはこの時だけの経験だった。その中に混じっていたのが、この紙片レで、綱吉の生類憐み令の初出が貞享四年の九月と言うから、それより二年前、既にこのような事例は頻繁だったものだろう。一体に評判の悪い法令だが、行き過ぎれば何事も裏目となるのは当然で、それは扨置き、迷い犬一匹の為にこゝ迄気をつかう文明国が、十七世紀という時期、この日本を除いて世界のどこに存在していただろうか。それだけでも十分に評価すべきことのように思はれる。



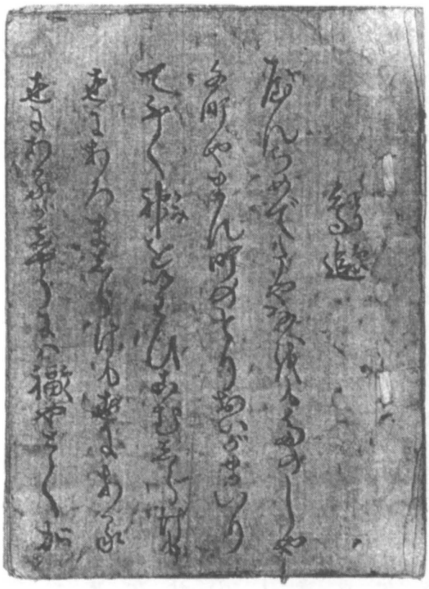
五十二　鳥追の文句

やんらめでたや　なおもたのしや　千町やまん町のとりおいがまいりて　ふく神をいわひこむ　しらげも世にある　ましらげも世にある　世にあるがじやうには　福やとくがまいりてな　やど借りよと申す　宿かし候へば　殿も栄へ候　おみ門に小帝　うちやとんの御内に　おとのするは誰々〳〵　左大じんにう大臣　かんばくさまのとりおいや　近衛さまとりおひ　さらばおい聞こめや　聞こしめせばおいましよ　西たが四千町　ひがし田が四千町　あわせ申せば八千町の坪のうち　中のまちのよひ所を　当年なこれさま　二町じやとも定めてな　さだめたがじやうには　一年の月数を　かぞへ〳〵参らしよ　十月あまるふた月が　師走の月をば乙子月ともさだめて　正月の月をば太郎月とも定めて　祝ふたがぢやうには　大晦日がこさありて　門餅の御祝ひ　かざりし物はなに〳〵に　おく山のうらじろに　と山のゆずり葉　千歳山のひめ小松　伊勢のよ

ふだの千代づるがしめ縄　みぎ左りとも餝りて　めでたふもござる　たのしよもござある　大晦日は祝ふたが　元日が御座りて　年とくのゑほうより　年男がまいりて　おみ門を押開　わか水をくみあげ　お手水なんどくまあして　四方の手を初て　ごきげんにまかせて　御冠を奉り　こんにちの御祝ひに　かざりしものはなに〳〵に　一にこんふ　二なんか　三に大根　しらとうふ　五煎まめになかもりが　七うど八薇ヒ九きたちに十午房　十二草の中に、いちをとるは黒鳥まめ　つまみまめでまいらしよ　元日は祝ふたが　三ケ日が御座りて　これより東の　朝日がゞやく百つぼざしきに　しきしものはなに〳〵に　高麗縁りのたゝみと　にしき縁りの疊　千疊弐千疊敷へならべなされて　長者さまや　ふくの神様や　御一門に御兄弟　車座にさらありと　なをらせ給へは　おん盃をなさるゝ　ながへのちやうしに　和泉の御酒を　かんのあたため　くちば色のうつわに　たぶ〳〵うけて　いつ献まいれそふもの　二献まいれそふもの　五献もせこんもまいるこそは御祝ひ　たまるこそは幸イ　おん祝ひともふして　御肴なに〳〵に　海のものでまいらしよか　山のものでいほふか　山の物にとりては　山しき田しき　あぜをはしるうたのきが　峯をありくそふし　きんちやほろゝうつほろゝ　打はきじや　ときわの国から　秋のきてはるもどる　がんのつまどり　かやうのものまでも　御肴どもまいらしよ　山のものは祝ふたが　川のものでまいらしよ　川のものにとりては　かも川の鮒の子に　かつら川のあゆの子　あゆにあひきやう　伊勢こひにすゞき　御世はめでたいますの魚なんど　御取り揃へて御肴ともまいらしよ　川のものでいほふたが　うみのものでまいらしよ　海のものにとりては　しやけにさゞひに　丹後ぶりにかずのこ　ひげながの海老丸に　あしながのがざみが　いかの黒に　鳥賊の手も八つある　たこの手も八つあるあわせもふせば十六本の御手を　御取りそろへて御肴ともまいらしよ　三ケ日を祝ふたが　七種が御座りて　つみ〳草はなに〳〵に　ごぎやう　田の草　すゞくさ　はこべ　もんの脇の（以下欠）

洒落本風の小本一冊。表紙も何もないが、六丁目迄を存してその後を欠く。丁度、七草の辺り迄があるので、その後に例の「日本の鳥と唐土の鳥と…」の文句がきて、あと二、三丁のものかと思う。刊年がわからぬのが残念だが、好もしい板面で、寛政は下らぬ江戸板であろう。

鳥追歌は既に浪華の狻猊子こと入江昌喜の『青陽唱詁』（一名・鳥追歌註解）安永八年刊本があって、その沿革



から文句の細註迄、端猊すべからざる学識が披露されているが、それは上方の鳥追、これは恐らく江戸での歌詞を示すものとみてよい。細部に種々の異同があり、これはこれで了阿上人辺りに是非註解しておいて欲しかった。

五十三　林子平考按　「文武兼備大学校之圖」

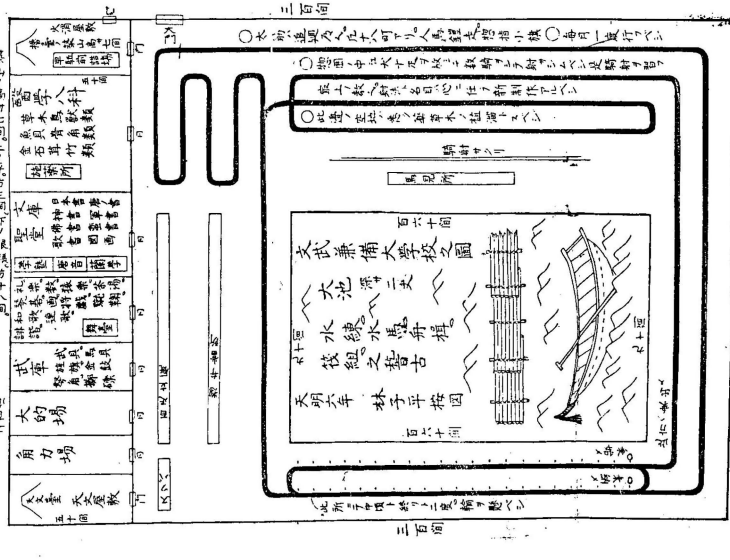
縦版一枚摺り。37.6×26.5cmの枠だが、枠外にも文字が刻まれるので、今風に言えばA3の版面に丁度収まる程度の大きさである。中央やゝ左に〈天明六年　林子平按圖〉とあつて、『海国兵談』と時を同じくして成稿したもの。寛政三年の私刊本『海国兵談』の第十六巻にも同図を収めるが、比べると細部に異同あり、やゝこの一枚摺りの方が詳細となる。前掲の〈天明六年〉云々の一行も、『兵談』には見えない。

この一枚摺製作のいきさつに触れたものに明治廿八年刊、伊勢斎助編『前哲六無斎遺草』がある。編纂の意図は題名にも窺い知り得る子平の遺文全部の簡略な紹介というにあるが、中に一節、「鈴木省三謹撰」とあつて「文武兼備大学校之圖解」と題する一文があり、〈此圖は林子ソノ兵学ノ門人ナル亘理往斎ニ与ヘシ所ノ木板ニシテ、コレ亦林子自画自刻ナリ。原板ノ所在ヤ知ルベカラズ。然レドモ〉とあって、以下、幸に佐沢広胖の所蔵する一枚があったので、それを模写し、明治廿五年の林子百年祭にその覆刻版を公刊した事、佐沢蔵品には左傍に亘理氏自身の手で、これを林氏より授かった次第、年月を記してあつて、それも共に模刻した事等が解説してある。但しこの章は右の解説のみにとどめて、現物の紹介はなされていない。

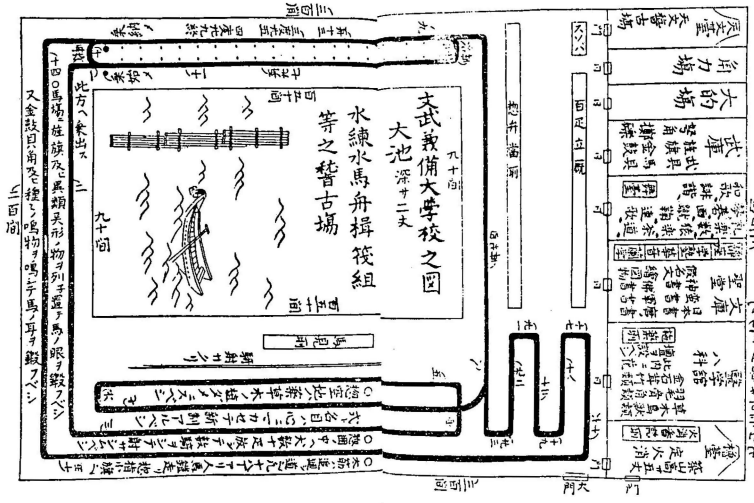
しかし、右の解説によって、本品が亘理氏へ授けたという林氏自刻の一枚摺りそのものであり、覆刻版でない事が判明するのは目出度い。『海国兵談』第十六巻本文はこの大学校設置計画の大要を説明する為の文章であり、その計画の具体図として右の図面を示した後に「左に図スル文武学校は、初より段々云シ如クまづ五六十万石の国の形勢を以て図スル所也云々」と云い、無論その趣意さへ失はねば広狭は随意で一、二万石の国であっても建立する事は出来やすかろう〈是、大將一人の胸中に有こ

となり〉という。その趣意の中心は「文武兼備」という所にあるので、「文」としては医学・天文学から唐音・蘭学、諸文芸、遊芸に迄及び、病院・農場の附設にも気が配られ、「武」には騎射は勿論の事、水練・舟筏の稽古の為の大プールが組み込まれる辺りが、「海国兵談」著者の面目という所でもあろう。

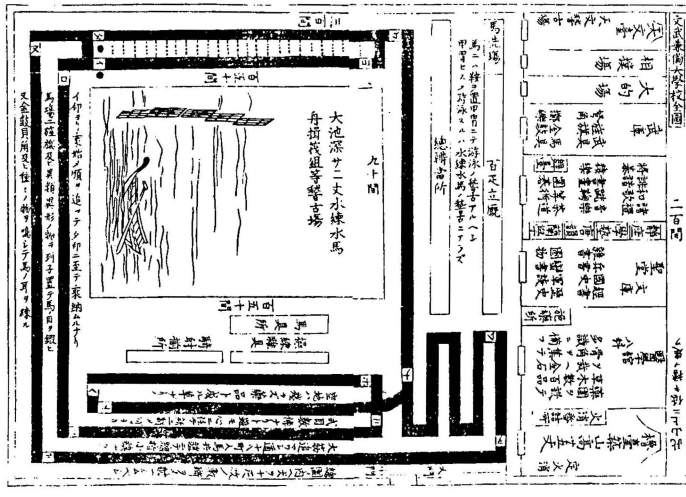
細分化した当今の大学と直截に比較してみても意味はあるまいが、それでも尚この趣意の中心となる「兼備」の認識は重要で、当今の大学の余りの技術偏重ぶりを見るにつけ、五、六十万石どころではない当路の御役人、特にその「大將」にその爪の垢でも煎じて提供したく思えてくる、と言えば、またかと言われようか。



（一枚摺）



（私刊本「海国兵談」所収）



（「精校海国兵談」所収）

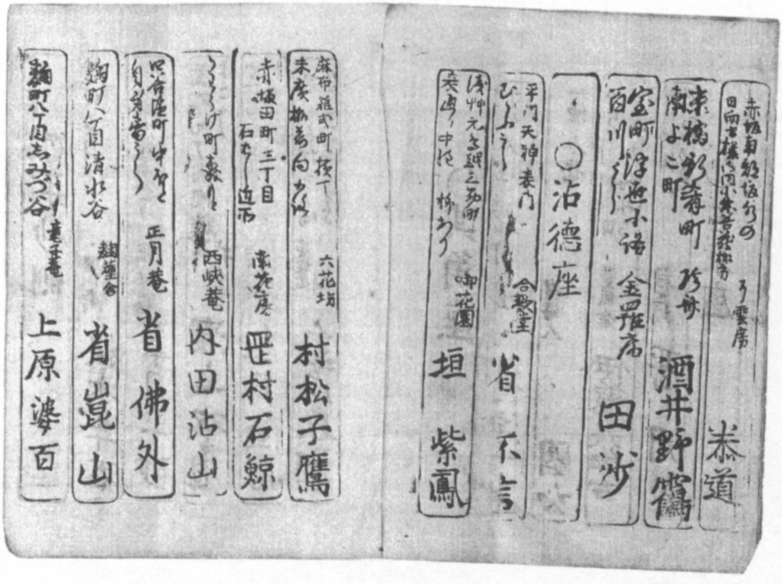
五十四　「俳諧家雅見種」二種

江戸座宗匠連中の住所録として刊行された「家雅見種」は安永三年有竹亭南山編の花久板が『俳書大系』に翻印されていて重宝だが、以降恐らく毎歳続刊された筈のものが案外に見当らぬゆえ、管見に入った二冊を紹介する。

その一は小本型一冊。薄茶表紙。外題は剝落。全八丁。序・跋・柱記・丁付は共に無く、刊記は巻末に宗匠の住所付と同じ扱いで「東叡山下竹町　星運堂　花屋久次郎刊」とあって、刊年を記さぬが、内容の顔触れと『俳諧觴』のそれとを付合わせてみて、大方寛政初年としれる。一行ずつを個別に刻んだスタンプの様なものを作っておいて、半丁六行の割で捺していったもののようで、一行ずつの入れ換えが出来るようにした板式の上でも一寸変ったもの。木活の一種ともいえばいえよう。

その二は縦細の小本一冊。薄茶表紙。外題は中央に子持枠で「俳諧家雅見種」とあるものを貼布。序一丁に本文十七丁、刊記・奥付・柱記・丁付の類は無い。

序は「家雅見種序　愛たき御代のしるしにはそも俳か



（その一）

（その一）

いの判せしむる輩月にふへ年にしけり其住居今まてあらわすと云ともこたひくわしく改月々披露　礫川　有竹亭

南山述「南山」とある。此方も、内容から大方寛政十二年頃か。半丁四行詰めだがスタンプ式ではなくて、普通に板を仕立てゝいる。

その一

○其角座

下谷池ノはた錦袋園うらとなり　松窓　崔海一漁

一漁仝庵　崔婦人　園女

かぢ丁壱丁目薬師しんみち　薫風舎　伊藤美佐古

薬研堀不動のまへ　桂下坊　晋　月叟

○古来座

寺坂南部坂水の日向守様御内小糸善蔵様方　了雲房　泰道

京橋新看町南よこ町　珍斎　酒井野鶴

室町浮世小路百川うら　金羅庵　田沙

○沾徳座

平川天神表門
むかふうら

浅艸元鳥越三筋町
表通り中程　柳あり

麻布雑式町横丁
末廣稲荷向小路

赤坂田町三丁目
石ばし近所

かわらけ町森もと

四谷塩町中ほど
自身番うら

麹町八丁目清水谷

麹町八丁目しみづ谷

○平砂側

八丁掘まつや丁

芝将監殿橋西通り
新門前

麹町九丁目挑燈屋
よこ丁

合歓堂　省　不言

啣花園　垣　紫鳳

六花坊　村松子鷹

南花房　岡村石鯨

西峡庵　内田沾山

正月庵　省　佛外

麹塵舎　省　崑山

竜子庵　上原婆百

徳山斎　榎本牛呑

萬葉庵　皐月平砂

井下庵　瀬上双鳧

芝三田小山間部様
御門前

芝かな杉二丁目
名主向うら

麻布笄橋向
桜田町代地

○宗因座

湯しま天神
中坂下ぬけうら

神田お玉ヶ池
横瀬様向角

筋かゑ御門外
金澤町東かわ

飯田町中坂右かわ
番所となり

池之はた錦袋圓
うしろとをり

○冬英側

小石川りうけいばし
蜂屋三郎左衛門様御物見横丁

四谷あいの馬場
なしの木のとなり

永田馬場山王
社地の内

若水庵　皐月陸馬

菜花庵　皐月東湖

無事庵　耕　巻周

万歳洞　小菅宝馬

一陽井　谷　素外

姸斎　島　津冨

幽雲斎　笠家左簾

方圓庵　島　得器

珍重庵　大塚雪斎

一巣庵　牧　冬映

旬樹庵　牧　五陵

○芭蕉派
麹町一丁目北うら丁
御堀端角より三軒め
無由庵　泉　虎渓

○古例座
露十取次
小川町安部様まへ
松頼母様御地うち
珠翠庵　東　阿澤

本郷御茶の水川端
建部六右ヱ門様御屋敷内
如葉　東　萬英

同
下谷金杉町一丁目
左かは
東明舎　笠原社来

下谷上野町三枚橋
横町湯屋の向うら
昨非庵　渓山傘車

竹葉城　志村露十

○周鯉側
天神妻恋御かご町
かけより四五間め
枝笠庵　萩原周鯉

新和泉町
自身番のうら
好華亭　長　萬夫

本所側
竹町渡場向通
太子堂向疊糸やうら
ホ饅頭　大坪嵐々

湯嶌中坂御手代町
右かわ下り口
麦林門
南新堀おとめ橋きわ
ゑちごやト云舟宿うら
一勺巷　加納夫水

○獨立
芝濱松町二丁目
ならやよこ丁
昨竹庵　燕　立和

立鼠同庵
隠里軒　今井立鼠

本郷伊豆蔵向軒道
磯部亀次郎殿地内
銀花斎　立賀

珪山同庵
摩訶窓　林　珪山

本町三丁め新道
木津屋といふ飛脚屋のうら
繭窓　真澄

赤坂黒二王谷
恋慶院同居
廿日坊　堀　国香

四谷塩丁
浄運寺横丁
一草巷　室田徳英

道灌山御用屋敷前
西ヶ原入口角
九花庵　衆　灌河

元鳥越続書かへ所跡
長屋近江や勘兵衛店
野等庵　楽　立志

自在庵　仲　千頂

駒込追分片町
薬花屋よこ町
八丁堀越中様御やしき
北よこ町
本石三丁目
長崎屋向うら
尾張町布袋屋
うしろしん道
駿河台袋町
堀田様御本やしき
青山百人町
田村様辻番前
下谷津軽様うら御徒士町
佐久間平吉様御内罷在候
坂本町
うゑき溜
浅草御門外
第六天うら門通
神田川柳橋きわ
浅草聖天町
浅草諏訪町
道具屋ニて

○

九花庵　石川遇春
餘力庵　正木呼童
源陽庵　圓叟敬忠
帆叟　海北待充
雪香斎　岡部盤谷
鈴木中阿
夢牛庵　田中艸字
一棒庵　山田きせ
西月庵　笠家雪堂
白雪房　深川石腸
千歳庵　衣香坊鳳翁
墨川漁　奥田喜三

日本橋新すき屋町
三島やしき

○江戸坐

柳原土手下
冨田様前通
小柳町
柳原土手下
中橋上槙町二丁目
紫屋と云染物屋向うら
小知同庵
いつみ町玄冶店
神田こんや町
壱丁目
雞口取次
池ノ端かや町二丁目
うら池ノはた

○存義側

日本橋木原だな
小伝馬二丁め大門通
堀内ト言酒屋方

立地庵　司馬可因
獅子眠　谷口雞口
神田庵　木村小知
石寿観　寿　秀国
三呼庵
芙天改　河野宗文
光風園　交　寛美
桂條亭　谷口蓬雨
龍鱗庵　坂　素月
吟花庵　原　徒流
夜月庵　水野山花
由来庵　桂　味道

本柳橋
舟宿きわ　柳橋庵　望月連馬

贈答
本所向じま
武蔵屋向ふ　牛嶋庵　晩得

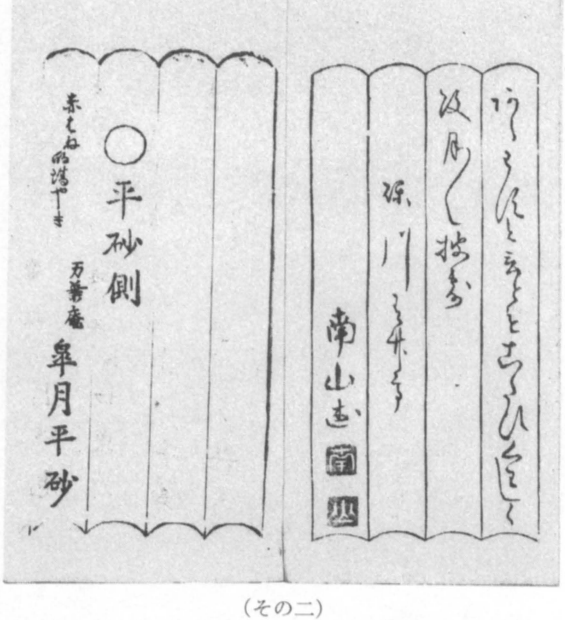
百萬座
麴町天神
表門向うら　星霜庵　熊谷白頭

日本橋左内町
かまふろのうら　伽羅庵　小栗旨原

新橋瀧山町　玉田夫　小栗岩松

年
東叡山下竹町　星運堂　花屋久次郎刊

その二（所附に数ヶ所、旧蔵者による墨筆の書入れがあるので（　）を以て示した）



（その二）

（その二）

○平砂側
赤はね的場やしき
かうし丁九丁目
てうちんやよこ丁

万葉庵 皐月平砂
麹莚 瀬上双鳧

芝口新せんざ丁入口
うしごみ御ほりはたこむさう会所近所
芝かはらけ町五丁めくはんおん堂うしろ森もと
（双鳧同居）
江戸見坂下仙石様御やしき内
両ごく横山同朋町

○其角座
中橋くれ木川岸いくしまやうら
築地飯田町加々爪様向
深川（木ば）下扇ばし丁
芝かはらけ町五丁めのしやト云セと物やうら
本所一ツ目弁天うら門
（あさふさくらぎ町札の辻）

遊漁庵 野口東故
風肝坊 皐月千鱗
師竹庵 澤 吾山
冬ノ日庵 皐月文瀾
馬勃庵 藤 凡澄
蘭堂 拳 徹叟

酒銭庵 深川宝井
六蔵庵 深川湖十
雀歩庵 深川春堂
寄々庵 深川紀逸
昇窓 深川木髪
[redacted] 深川野菊

大はしあたけ
大日よこ丁（中山氏）
湖十同庵
深川六間掘
神明うら門前
○宗因坐
かんだお玉かいけ
よこせ様向角
土手下小柳丁
はまくり新道
ゆしま天神
男坂下がけきわ
本郷竹丁片かわ丁
南むき
ゆしま天神前
黒門きは
南八丁ぼりあさりがしうら通り
松平久五郎様御門前
（得器同所）
赤城下水道丁
どぶ湯向ふ
すしかひ御門外
たかさごや北よこ丁

龍壷　川　六駕
三爪庵　深川柳尾
應笑庵　高田還児
一陽井　谷　素外
方圓庵　島　得器
五耕堂　太田九井
幽雲斎　笠　左簾
青松庵　関　立志
央瓠庵　嶌　古梁
膠瓠庵　嶌　器歓
瓠下庵　山方白英
損益庵　岡　得友

白英同庵
○沾徳坐
浅くさ三すじ丁
表通り中程　柳有
麻布そうしき丁
よこ丁末広いなり向小路
赤坂田丁三丁目
かわらけ丁
森元真木やうら
赤坂田丁二丁目
御ほりばた
麻布善ふく寺前
せんだい坂
芝三田小山
間部様御門前
四ツ谷右馬どのよこ丁
（古村又右衛門様）
あさぶ新町天真寺門前
名主の向
沾山同居

松声庵　嶌　一経
卿花園　垣　紫鳳
六花坊　村松子鷹
南花房　岡村石鯨
合観堂　内田沾山
麴蘆舎　省　崑山
白花房　松崎團雪
若水庵　岡村陸馬
円亭　省　仏外
杉堂　為大
精斎　百化

○贈答
芝田丁八丁目
きくらやといふろうそくやうら
（富屋取次）
嵐亭　冨屋
長霄庵　堤　奚疑

○其角坐
いけのはた仲丁
つちやまよこ丁
松窗　崔海一漁
崔婦人　園女
霊かんしま長さき町
二丁目
米観窓　冲巣
（一漁同居）
睡鷗舎　崔海堤亭

○冬英側
四ツ谷さめがはし
坂の丁中ほど
一巣庵　牧　冬英
青山百人丁
田村様辻はん前
無為庵　鈴木中阿
あさぶさくらだ丁
いなりまへ本や弥七のうら
無事庵　耕　恭周
青山百人丁入口
教学院三間目木戸
旬樹庵　牧　一寛
冬英同居
蓬窓　牧　野一

四ツ谷塩丁中ほど
火の見向うら

○徒流一列
神田明神石坂下
横丁同朋丁
南かぢ丁一丁目
すしや同居
ゆしま女坂下
目白坂
中ほど
深川あたけ
大日よこ丁
一ツ橋通り水道□内
塙宗悦様わき

○曲庵正流
（瓠山同居）
川越住

○春来坐
（馬道正直そば
向□内）
浅草北馬道
せんぞうゐん地内

莟桃斎　牧　花蹄
吟花房　石原徒流
縁庵　楠部秀瓠
知足庵　生　瓠山
樗窓　千葉涼波
白日庵　岸　雷谷
昨非庵
栖隠　渓山利牛
[redacted]　笠家宗梅
素竹軒　笠　十因
曲笠庵　國枝春来
時々庵　安田渭北

かうじおむまや谷
森川様御長家　琵琶窓　秋田秀億

○晋子派
よし丁新道
名主向　御溝園　河竹千秋

○芭蕉派
かうじ丁壱丁目
新道　無由庵　泉　虎渓

○珠来門
芝口一丁目
松坂やとなりうら　帆叟　海北退住

○古来坐
赤坂なんぶ坂水野日向守様
御内北条善蔵様方　了雪房　豢道

○古例坐
本郷御弓丁
いせや仁兵衛方　珠翠庵　東　阿澤

○獨立
本郷はる木丁
（近藤様前）（二丁目）　娥婦人　林　真澄
浅くさすわ丁
道具やにて　墨川漁　奥田喜三
芝□井町よこ丁
建はしご下タ　一樹庵　浅埜春義

○
（向しま中田や）　大夢庵　象　関河
（上州大間々）　一嘯庵　志を小坊　蘇門
浅くさ見付外
代地南がわ　一志庵　渓　一峩
神田明神石坂下　虬戸庵　素綾
（しんば）　雨什

○江戸一列
柳原土手下
斎田様前　獅子眠　谷口雞口
かぢ町一丁目
下駄しん道　神田庵　木村小知
御くらまへはたこ丁
中代地　西月庵　笠家雪堂
新はし
たき山丁　狂雷堂　小栗岩松
日本橋西川岸　竜鱗庵　坂　素月
（六間ほり神明前
木□や源七方）　柳橋庵　望月連馬

馬喰丁三丁目
ばゝの前　河上庵　橋本泰里

本郷追分
手習師匠向　春日庵　神山野馬

芝口一丁目うら
脇坂様御門前　閑月庵　倉野世塵

泰里同居　愚々庵　松本守中

（砂利ば山川町
仮宅柳やうら）　汲後庵　千束其爪

外神田大通り八軒丁
ゑはんぎりやきは　徳庵　田中山花

こまかた材木丁
つちやのとなり　菜庵　滕　朝四

小知同居　青々斎　園　猗竹

素月同居　青蘿観　乾　秀僊

○贈答

御くらまへ川原丁
大代地　晦朔庵　石橋宝寿

因みに本書初編は、『俳書大系』に翻印された安永三年板といわれて久しいが、『俳諧觴』の三編は、安永二年癸巳春の序があつて、その凡例には、「住庵の町附等は家々見艸にくわしければ、是をもつて改むへし」といゝ、『觴』続編迄には確かに附けられていた各宗匠の所附が『觴』三編には既に省かれている。恐らく本書初編は安永二年なのではなかろうか。『俳書大系』翻印本の刊記は年記のみを安永三年相当に改刻したのではないかと思うが如何か。

五十五　青洋漁歌

桂青洋といえば岸駒門の画人として、また玉兎園澄丸といえば天保期京都狂歌壇の重鎮として、その活動はかなりしられた存在であり、特に『狂詠都名物集』や『菱花集』などの絵入狂歌本に見せる極彩色の挿画のあでやかさは、幕末京都画壇の通俗性への徹底ぶりを一身に体現した感のある人物であるが、一方では漢詩の実作もなかなか堂に入ったもので、詩稿『青洋漁歌』一冊を残していることは案外しられていないのではないか。

半紙本写本一冊。外題は「青洋漁歌」とあるが内題は

「青洋漁唱」としてその下に、「青洋桂彰吉哉咏輯」と続け、内題下には「桂彰之印」の朱印を実捺し、本文にも随所に切り貼りして詩句の改削を行うなど、紛れもない自筆詩稿の一冊である。全五十五丁、詩体別に七絶九十一首、五律廿八首、七律九十六首、七言排律四首、追加混雑体百十首と結構な充実ぶりで、内容はやはり画人らしく画題を作るものが多いが、一方「春日田園雑興」や「吉原竹枝」等の連作、或いは「走馬灯」や「掃晴娘」等の詠物の奇題も混じて、当代の風調にしっかりと嚙み合っている辺りも見所ではある。安政二年九月の江戸下りの作とわかる吉原竹枝九首中の一に扇屋の花扇を

夾路紅燈照艶妝　軽移彩屐輭塵香
繡袿錦帯抽群美　恐是五明花扇娘

と詠じるなど、早速にも姿絵の一幅など認めたかもしれぬが、こゝには「書窗雪懐二首」と題した七律を引いて、その胸中をのぞく便とする。

北窗毎倣陶公睡　書帙托肱痕作拗
静適詩情三椀茗　愁招酒癖一盤肴
甘貧何厭調魚渇　羹拙難逃題鳳嘲
世事近来渾擲去　柴扃只任緑蕉敲
自笑生涯投几案　應同漁父楽天江
酒甌如海書如岸　筆管作篙箋作船
夢到桃花流水境　心遊朗月清風辺
偶然釣得新詩去　不待金鱗巨口懸

毎に陶公を慕うのは詩人ぶりに過ぎないのか、本心なのかは軽々に確かめ得ないが、濃彩の狂歌絵本の画風からは汲みとれない風懐ではある。一方又、「書中乾胡蝶」と題する七律

三春狂罷厭花房　書帙蔵身不恋香
已断捜紅穿緑念　猶留傅粉暈金妝
翅辞東吹態雖静　魂入南華夢又忙
鴨脚葉間濃睡裡　嘆乾対舞旧衣裳

書帙の中に虫除け銀杏の葉と一緒にはさまっていたらしい蝶の乾いた翅を詠むというのは、余り見かけない、というよりはまず他に類例のない詩材で、こゝに画人らしさを見るといえば、聊か索強に過ぎようか。

青洋漁歌

全

青洋漁唱

七言絶句

青洋桂彰吉哉咏輯

新年口號

郊山淑景共梅妝先喜南窗數朶香老眼懶看

新曆字早鶯來處卜祥方

春夜賞餅梅

秉燭貪看餅裡春枝枝綴玉自無塵清香惱我

不成睡勞鬢蘭閨對美人

青樓春雨

柳外頻啣白鼻騧翠樓微雨若絲斜簾前不管

五十ノ補　蓋九齢の「柳園詩稿」

本誌第七号に右の題で収めた一文につき、その後『続近世畸人伝』巻二に「端文仲　氏家伯寿」の一項あり。その氏家氏がこの蓋九齢その人である事に気づいた。伝に曰く、本姓は加藤、後に京の医人氏家柳園の家を継ぐ。柳園は有賀下流の歌人として聞こえた。九齢また歌を良くし、漢学を教授したと。「然もみつから所作の詩歌すべて書もとゞめず散失たるを、歿後知己の人はつかに集るもの有。其二三首左に挙ぐ」とあつて、「泚汜湖二首」「寄東適禅師」「明妃曲」の四首を記す。右の四首は凡て「柳園詩稿」中に見えるので、蒿蹊言う所の「知己の人はつかに集るもの」とするのがこの「柳園詩稿」であろう。あるいは歌稿も共に編まれていたものかもしれぬ。伝には更に、「性、瓢逸風韻有り。且古詩を説話することを得て、人を絶倒せしむ。晩年には王陽明の学を信したり」とあつて、早くは田中江南、後れて葛西因是や柏木如亭の様に漢詩の俗解が得意だつたらしい。陽明学に傾いたという辺りも見逃せぬ気がする。蒿蹊とは友誼を結んだというが、その龍草廬に師事するを一言も触れぬのは聊かいぶかしい思いがする。